

遊文通信

今回の遊文通信は…

- DTP の原野を切り拓く
本郷氏に聞く「遊文舎の曙」

DTP の原野を切り拓く 本郷氏に聞く「遊文舎の曙」

遊文舎勤続45年の最古参、
本郷正幸氏が8月20日付けで退職されました。
共に遊文舎の揺籃期を支えてきた
三宅由美子と、その軌跡を振り返ってみました。



三宅 本郷さんが、当時の木原印刷所に入社されたのは、1980年4月、近畿大学水産学部卒業してまだ学生気分のぬけきらない25歳でしたね。当時は私も印刷業のかたわら大阪文学学校へ通って雑文を書いたりしていて、そこで知り合った友人の紹介で、デザインができるという触れ込みで、本郷さんに入社してもらいました。

本郷 デザイナーということでしたが、いきなり手動写植機のオペレーターをやれと言われ、戸惑いました。会社も法人化してまだ1年で、社員も11名でした！

三宅 当時の軽印刷はタイプがメインで、写植機の出始めでした。私もタイプから写植へ変わって教えてくれる人もなく、なかなか捗らない日々だったので、若くてキレイそうな本郷さんがどんどんやってくれるので感心しました。

本郷 当時の木原印刷写植1号機が、今も会社玄関に展示してあるモリサワMD型。僕はその次のMC-6型を使わせてもらった。文字盤が2枚載せられるので、MD型の三宅さんから怨嗟の眼で見られたのを覚えている。先輩が毎朝一番に、暗室のバットに現像液と定着液を作って、その管理もやってくれた。僕は遅刻ばかりだった。

三宅 先代社長の木原基彌が機械フェチで、どこかの病院のお古を手に入れ、暗室の扉を回転扉にして悦に入ってた。はじめてハイデルの菊4印刷機を導入した時は、毎晩夜中に工場に忍び込んで機械を撫でまわしていたよ。

ところで当時と現在の社内を較べると隔世の感あるよね。印刷業界の技術革新のスピードは目まぐるしく、私たちが喘ぎながら追

っかけてきたけど、暗室ははじめ消えていったツールは限りないよね。

本郷 1995年ごろからDTPになって、まず「版下」がなくなった。頁物の版下は、写植の印画紙やタイプの清打ち用紙を台紙に貼りこんで面付。カラー物はトレベを被せ、色指定やアミ指定して製版屋さんに回していた。写植級数表・ペーパーセメント・ディスペンサー・ロットリング・カッター・ラバークリーナーなど、版下の小道具も懐かしい！ A半裁の色指定だけで4時間くらいかかった。

三宅 DTPでは、端物はMACのQuark、頁物はWINDOWSの専用機でスタートしたが、本郷さんはMACの立ち上げをインデザインまで、独力でやったね。WINの方はWAVEやRISAWORDまでは私も触ったけど、結局、双方ともインデザインに落ち着いて、今はデータ互換も問題なし。

本郷 このDTPの創世記が一番大変だった。まだほとんど普及もしていなかった為に教えてもらえる環境も無く、ハウツー本も無く、アプリの取説をたよりに勉強していくしかなかった。使えるようになるのに試行錯誤を繰り返した。自分の中では一番しんどかった作業です。それ以降は何度もバージョンアップが繰り返され新機能がどんどん追加された。その度にどんな事が出来るようになったのかワクワクしながらさわった事が思い出されます。

三宅 1999年には、社名を「遊文舎」に変更した。インデザインで制作の道筋が見えてきたころ、後工程の製版部門に激動の波がきた。面付済・分版済のデータを刷版に直接出力するようになって…。ワークフローリップやプレートセッターの選択



株式会社

遊文舎

[大阪本社] 〒532-0012 大阪市淀川区木川東4丁目17-31
TEL: 06-6304-9325 (代) FAX: 06-6304-4995
[東京支店] 〒101-0061 東京都千代田区神田三崎町2丁目20-7 水道橋西口会館 8F
TEL: 03-5357-1420 FAX: 03-5357-1421
[京都支店] 〒601-8106 京都府京都市南区上鳥羽北中ノ坪町2番地
TEL: 075-681-7748 (代) FAX: 075-672-5602

<https://www.yubun.co.jp/>

E-mail: info@yubun.co.jp

株式会社木原印刷 20周年記念祝賀会



1998年10月 ホテル阪急インターナショナル
前列左から2人目：庸裕現社長、5人目：基彌社長、6人目：三宅専務、
9人目：本郷部長

等、私には全然分からなかった。

本郷 この頃、基彌社長に呼ばれ、業務部長として制作・製版・印刷の面倒を見てくれと言われた。MACから離れ、製版部署でファシリスや大日本スクリーンのAD-RIP（単体リップ）に張り付いた。MACとWINが別々のRIPだったこともあり、とにかく標準化しようと思った。

三宅 この頃、RIPとプレートセッターを巡って、本郷さんの直訴(?)事件があったと聞いているけど…

本郷 オフレコやったけど今ならもう笑い話としてオープンにしてもいいかな。

当時、大日本スクリーンのRIPを採用していたけど、どうも使い勝手が悪く捗らなかった。A全のプレートセッターを入れる

にあたり、僕はFujiのXMFに切り替えたかったので、直接Fujiの担当営業に電話して、とにかく来社してプレゼンしてくれと頼んだ。あとから聞いたが、Fujiは業界のルール違反と思ったのか、直接スクリーンに了解をとったらしい。やはり縄張りというか棲み分けは守らねば、という意識だったみたい。それだけのことをしたという思いで、XMFの立上げも必死で頑張って2週間でクリアした。Fujiの指導員も普通1ヵ月にかかるのに！とビックリしていた。

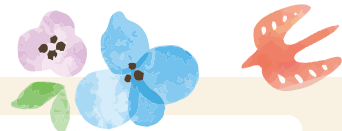
三宅 おかげでXMFはワークフローRIPとしてバージョンアップを重ねているね。また、このころからデジタル印刷機が始め、少数・短納期・製本までワンストップという時代になった。現庸裕社長は設備投資に

は積極的で、先日にもフジフィルムのRevoria Pressを入れ、大阪本社にデジタル印刷機8台が並んでいるのは、昔を思えば壮観としか言いようがない！

本郷 今では大手出版社の月刊誌もオンデマンドで印刷してるらしいよ。増刷もすぐだし、在庫かかえるリスクもないからね。とにかく「本」に関する環境は激変していくだろうね。

三宅 まあ、コミュニケーションツールとしての「本=文字」は残るだろうし、印刷業ももっと業態変革して生き延びていくだろうと、怖くもあり楽しみでもありますね。

最後に、本郷さんは、業務部長から60歳の定年後は執行役員として5年、その後嘱託として10年、今も難しいデータ処理は他をぬきんでいる。尊敬と共に本当に心からの有難う、そして3人のお孫さんと健やかな時をお送りください、と祈ってお別れします。



長くて短かく、しんどく楽しかった45年！

本郷 正幸



先日は、社内にて退職ご挨拶の場を用意していただき、また夜の送別会にも多くの方が参加してくださり、有難うございました。25歳から勤めているので45年在籍した事になります。45年という長きにわたり勤める事ができましたのも亡くなられた会長と専務の三宅さんが私の独特の個性を認めてくれたからにほかなりません。

数々の記念品を頂き、一番驚いたのは色紙です。皆さんで寄せ書きをしてくれていました。帰って読んでみると過去の出来事が思い起こされる内容などもあり感無量になりました。いただいた記念品のスマートウォッチは、

初めて使うので取説を見ながら覚え、健康管理に使わせて頂きます。ずっと指

導した後輩のNさんに泣かれた時はドキドキしました。

退職後の印刷通販のデータ処理など気になる事案もありますが、引き継ぎのメンバーでうまくやってくれと信じています。

皆様の今後の奮闘、活躍が想像されますが、体に気をつけてお仕事して下さい。まだまだ先は長いですから！しんどくもあり楽しくもあった45年でした。簡単ではありますが、退職のご挨拶とさせていただきます。



■編集後記

日々エアコンの偉大さを実感しながら過ごす夏の日々になります。
私は若干夏バテ気味ですが、なんとか食事など意識しながら乗り越えようとしております。
皆さんも元気にお過ごしください。

■今月の紙

エスプリ FM
菊版 76.5kg